
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 75

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1481. 夢を見ぬ日々と課題の性質について
- 1482. 作曲実践の再考
- 1483. 花火大会と夢
- 1484. 調和をもたらす作曲実践と作曲の方向性
- 1485. バッハのゴルトベルク変奏曲『アリア』から
- 1486. 作りに作る生活
- 1487. 自己創出的・自己建築的な運動を促進する手段
- 1488. 音楽理論の学習と作曲実践の進展
- 1489. 無限と永遠の表現へ向けて
- 1490. 科学者・哲学者・作曲家として生きること
- 1491. 黒の黒さに酔う夢
- 1492. スペインの片田舎から
- 1493. 受け継ぎ、受け継がれるライフワーク
- 1494. 自分を象徴する印象的な夢
- 1495. 型を求めて
- 1496. 時間の箱と自分の時計
- 1497. ムツィオ・クレメンティと理論という公共財産
- 1498. グランドピアノから天に向かう夢
- 1499. 共通の天へ
- 1500. 一期一会の余韻と独坐観念

1481. 夢を見ぬ日々と課題の性質について

印象的な夢を見ない日々がしばらく続き、そろそろ何か強い印象を残す夢を見そうだという予感がする。見てはならないものを見たいと思う戦慄的な好奇心が高まっており、今夜あたりに夢を見るかもしれない。

一昨日と昨日はオンラインゼミナールがあり、普段はクラスの後の夜に必ず何かしらの夢を見るのだが、一昨日と昨日に関しては何も夢を見なかった。考えられる無数の要因の中で、一つだけ主要なものを挙げるとするならば、ゼミナールにおける学習場で共有・醸成されている集合意識が落ち着きを見せたことだろう。

全六回のゼミナールも第四回に入ったということもあり、コミュニティ内での集合意識が安定を見せ、それが自分の個人的意識の深層に作用していると考えられる。今は集合意識が安定期に入ったとわかるが、おそらく残り二回のクラスにおいてはまた集合意識の性質が変わり、ダイナミックな動きを持つものになるかもしれない。その時にはまた印象的な夢を見ることになるだろう。

今日も相変わらず、人間発達に関する専門書を読み、作曲に関してあれこれと考えるような日々であった。午前中の時間の大半をいつものように探究に充てた後、昼食を摂っている時に「課題」というものについて考えていた。

誰しもがその時々に何かしらの課題を抱えている。そして、私たちはその課題を解決したいと思うながら日々を過ごす。しかしながら、一つの課題が完全に解決されることなどないのではないかと思う。別の表現で言えば、一つの課題が克服された後に次の課題に移ることなどないということである。

私たちは絶えず課題を抱えながら、課題と共に歩み続けることを宿命づけられているのではないか。「宿命」という言葉はいさか仰々しいかもしれない。だが、それほどまでに私たちは、一つの課題を完全に乗り越えることなど不可能であり、ましてや一つの課題を克服した後に次の課題に綺麗に移れるように事は進んでいかない。そうであるならば、課題を克服するための支援のあり方をもう一度問わなければならぬように思う。例えば、課題解決型のコーチングやメンタリングというのは聞こえ

はいいが、私たちが抱える課題の本質を考えると、そうした名前を冠する支援方法はどこか違和感を引き起こす。

課題というのは完全に解決されることなどなく、既存の課題はまた新たな課題を生み出す。成長や発達の支援者として可能なのは、課題との向き合い方を支えるだけであって、課題を根本的に解決しようと奔走するのはどこかおかしな気がして仕方ない。2017/8/28(月)

No.127: Indispensable Constraints for Expression

Frameworks of classical music are beneficial for solidifying the foundation of my music composition.

A couple of days ago, I thought that jazz styles were captivating from a perspective of expanding the horizon of my music composition. It is still true, but I want to prioritize learning the rich frameworks of classical music. Frameworks are not restrictions to express myself but vital and indispensable constraints to do so. The frameworks of classical music are an open door for freely expressing my inner world. Friday, 9/1/2017

1482. 作曲実践の再考

今日は作曲に関してまた色々な気づきを得られた一日だった。これまで英文論文を執筆する方法や日本語の書き方に関して、自分の文体を築き上げるための手本のようなものを絶えず参照してきた。具体的には、優れた英文論文や和書を手書きで写すということを長らく修練として課してきた。作曲に関してもそれと同じように、バッハ、モーツアルト、ベートーヴェンが残したピアノ曲の楽譜を購入し、それを自分で譜面に再現するということを少しづつ行っていた。

しかし、この実践に従事すれば従事するほどに、自分の作曲スタイルを確立することはおろか、これらの偉大な音楽家の仕事に圧倒されてしまい、何か曲を生み出すことに躊躇してしまう自分がいたのである。特に、私が参考にしていたのは彼らのピアソナタであり、今日遅まきながら気づいたが、ソナタ形式というのは「序奏・提示部・展開部・再現部・結尾部」から成る、最も古典的なピアノ曲の形なのだ。

音楽の素養が無い私にとって、偉大な作曲家のソナタ形式の模倣から入るのはあまりにもハードルが高いと改めて思ったのである—ましてや四楽章ほどに至るピアノソナタから入っていくのはさらに難解である。そもそも、私にとっての作曲は、自分が毎日考えていることや感じている素朴なことを音として表現することにある。誰もが人間として生きていく中で経験するであろう事柄を曲にしたいのだ。

曲として表現したいものを曲として表現できればそれで十分であり、それ以外に望むことは何もない。そう考えた時に、ソナタ形式の模倣と習得から入るのは賢明ではないのではないかと思われた。

曲として表現したいものが自分の内側の世界に一杯となり、どこか窒息しそうなぐらいだ。「フローニンゲンの夏の夕陽」「早朝の小鳥のさえずり」「上昇と下降の道」「過ぎ去りし日々の波」「空の青さの青さ」という観念的・感覚的な主題が音になろうとして、自己の存在の産道から外に出ようとしている。

私が唯一望むのは、その手助けだけであり、それ以外には何も望まない。音として外側の世界に出ようとしているものを、るべき姿で外側に表現していくこと。ただそれだけを行いたい。こうした動機が最も重要なものであり、それを実現させるための作曲学習と作曲実践を進めていきたい。確かに、日々クラシック音楽を聴く中で、感銘を受ける数々の曲と出会う。

比較的現代の作曲家に範を求めるのであれば、やはり先日のノルウェー旅行で出会った、エドヴァルド・グリーグの仕事を参考にしたいと思う。特に、『抒情小曲集』はソナタ形式を採用しているわけではなく、一曲一曲が短いこともあって、非常に探究を進めやすい作品集だと思う。だが、音楽はクラシック音楽だけではない。その国の人々が長大な歴史の中で育んできた民族音楽を筆頭に、アニメ音楽やゲーム音楽にも関心の輪を広げている。

今私が学習を進めているテキストには、民族音楽の短めの節が時折掲載されており、その中でも、アフリカの民族音楽やアイルランドの民族音楽が印象に残っている。さらには、私の深層部分に染み込んでいるスタジオジブリの音楽や各種ゲームソフト（「ドラゴンクエスト」「ファイナルファンタジー」「クロノ・トリガー」）の音楽も、自分の内側にあるものを表現する際に非常に参考になると思い、それ

らの音楽がピアノ曲としてアレンジされた楽譜を購入し、今度日本に一時帰国した際にはオランダに持ち帰りたいと思う。2017/8/28(月)

No.128: Continuous but Developmental Process of Question-and-Answer Pattern in Music

One feasible and useful form of music composition would be a question-and-answer pattern. Two measures construct one question, and the following two measures represent the answer. Applying this pattern, I discovered that I could dialogue with myself through music. I made a hypothetical experiment of how a musical dialogue works.

The experiment gave me a profound insight about the uniqueness of the dialogue. As well as a poem, a piece of music creates a unique space in which a distinctive dialogue occurs. I am willing to continue to dialogue with myself in the universe of music that I invent. Friday, 9/1/2017

1483. 花火大会と夢

昨夜は就寝中に花火が打ち上がった。夜の十時を迎えたところで花火大会が始まるとは思ってもおらず、随分と遅い時間に花火が打ち上げられるものだと思った。

前回は確か、夏季休暇に入る頃に一度花火大会があり、その時も就寝中だった。あの日は最初何の音か分からず、それが花火と気づいてからもしばらくベッドの上にいて、久しぶりに花火を見ようと思つて寝室を後にする、ちょうど最後の花火が地上に落ちていく姿だけを見ることができた。

昨夜はすぐにそれが花火だと気づいたが、それほど大きな関心を示すことなく、結局花火を見に書斎に戻ろうとは思わなかった。というのも、寝室で花火の音を聞きながら、昔地元で見た花火大会の記憶を思い出すだけで十分だったからである。その瞬間に打ち上げられる一つ一つの花火の音を聞きながら、私は以前地元で見た迫力のある大きな花火の記憶を一つ一つ思い出していた。

花火が夜空に打ち上がり、それが満開に開くときのあの迫力のある姿と全身を打つ力強い音の波。花火を近くで目の当たりにしていたときの一つ一つの記憶が蘇り、あの時の光景はまるで宇宙の誕生の瞬間に出会っているようだった。人はそのような瞬間に出会う時、言葉を失つてただその瞬間にたたずむのだと思う。

数十分ほど続いた後、最後の花火が打ち上げられた後、再び静寂な夜の世界が戻ってきた。そこから私は安らかな眠りについた。

昨夜の花火は、何かを暗示しているように思える。それは私の人生における新たな始まりを祝ってくれているかのようであり、励ましをもたらしてくれるかのようであった。昨夜の花火によって睡眠時間がいつもより数十分ほど遅くなつたが、起床時間は五時半を少し過ぎた頃だった。心身の調子がいつも以上に良好であり、今朝も早速仕事に取り掛かることにした。

一日の仕事に入る前に、昨夜見た、それほど印象の強くない夢について思い出していた。ここ最近は夢を見ていないため、昨日はそろそろ夢を見るかもしれないということを偶然ながら日記に書き残していたが、本当にその通りになつた。この夢はそれほど強い印象を持っていないが、記憶の中に確かに留まり続けているため、少し書き留めておきたい。

夢の中で私は、米国西海岸ロサンゼルス近郊の日本食レストランにいた。ここはバイキング形式で食事をすることができ、レストランで働いている人は全て日本人だった。私の周りには知り合いは誰もいなかつたため、自分はこのレストランに一人で来たのだということを知る。

調理場が見える場所にバイキングの料理が並んでおり、一番右端にある料理を取ろうとした時、調理場の女性が私に注意をしてきた。

調理場の女性:「あっ、すいません。自分の箸ではなく、取り箸で取ってください」

その言葉に対して、私はまだ自分の箸を一度も使っていないことを伝えると、その事実に対して調理場の女性は安堵の表情を浮かべた。ただし、そこからは自分の箸を使うのではなく、取り箸を使って料理を自分の皿に盛っていくことにした。その料理から順番に左に動いていくと、一人の男性が調理場の男性に質問をしていた。どうやら何か特定の料理が食べたいらしく、それがどれなのかわからないようだつた。

二人の会話の様子を見ていると、質問をしている男性は生粋の日本人であり、駐在員か何かだと思った。一方、調理場の男性は日系か米国で生まれ育つた日本人だとわかつた。調理場の男性は、

質問を受けた食べ物の日本語を知らないようであり、その客の質問にうまく答えることができていな
いように思えた。

調理場の男性:「その食べ物の名前は聞いたことがなく、あるのはこの三つだけです」

日本で長らく生活をしている者からすると、この言葉は少しばかりぶつきら棒のように響くかもしれないが、この国この場所では全くおかしくない率直な表現だった。質問をした駐在員らしき日本人男性も諦め、しぶしぶそれら三つのうちの一つの料理を皿に盛っていた。

その後私は、旅先のホテルの朝食のように、しっかりと食事を摂るべく、多くの料理を自分の皿に盛っていった。そこで夢から覚めた。

実際には、夢の中で調理場の女性と日本語であれこれと話をしたり、飲み物を自由に取ることができ機械の具合がおかしかったり、間違えて熱いお茶を少し入れ、その上に冷たいお茶を入れたりするということがあった。いずれにせよ、昨夜の夢を書き留めてみると、その印象が少しばかり強くなつたような気がした。とりわけ、客の男性と調理場の男性とのやり取りは、何か重要なことを暗示しているように思える。2017/8/29(火)

No.129: Our Clock

We do not need a clock that somebody made for us. However, we need one that we made for ourselves.

Time passed quickly, but I felt that the lapse of time generated from my clock. As I mentioned, making our own clock is important, but a more essential point is forgetting to have the clock that we made.

Who cares about time if he or she genuinely lives at that moment? A person who can live in the timeless world does not need a clock per se. Friday, 9/1/2017

1484. 調和をもたらす作曲実践と作曲の方向性

昨日の作曲実践は大変実りあるものであり、随分と多くの気づきを得た。今朝の調子が良かったのは、作曲実践が日々の自分の生活の中にうまく溶け込み始めたからではないかと思った。つまり、一日の中で学術研究と作曲実践を交互に行っていくと、自分の内面世界に調和がもたらされるようなのだ。学術研究にせよ作曲実践にせよ、どちらも共にある種の快楽を私にもたらすことは間違いないが、以前のように学術研究だけを行っていた時に比べて、内的世界がより調和のとれたものになっているように思える。

とりわけ、一日の全ての時間を研究に充てていた頃は、一日の最後に見えない疲労感に襲われ、そこから回復するのに毎日九時間ほどの睡眠を必要としていた。しかし今朝の起床のように、学術研究の合間に作曲に関する学習や実践を挟んでいくと、一日の仕事がとても調和の取れたものとなり、起床時の心身の状態がとても爽やかになる。

古代ギリシャのピタゴラスが音階の中に一つの法則を見出し、音楽の本質に「調和」を見出したように、まさに作曲実践を通じて音楽に触ることは、心身の調和をもたらすことにつながることを強く実感するような体験だった。理想としては、一日の仕事始めの前に作曲実践を行い、日中のどこかと夜のどこかで作曲実践を行いたい。一日の仕事を一つの音の流れだとすると、作曲実践は休符記号となり、適度な休息をもたらし、仕事のリズムを作り出すだろう。

そうだったのだ。これまでの私の仕事の中には休符記号が一切なく、リズムのない単調なものだったのかもしれない。

書を読み、文章を書き、音楽を作るだけの生活。それら三つが全て自分の仕事に昇華され、それら三つを調和の取れたリズムの中で進めていく生活に早く入りたいと思う。自宅の書斎の中だけではなく、大学の研究室で仕事をするようになれば、そこでも作曲実践を欠かさずに行いたい。研究室の中で音楽をかけ、音楽を作れるような環境のある大学でなければ所属しない。学術研究と作曲実践の双方に打ち込めるような大学をこの世界のどこかに見つけたいと思う。

昨日の日記で書き留めたように、自分の曲は日々の何気ない思考や感覚をもとに作られるものであり、根幹部分で全ての人間に共通する主題を取り扱うものにしたい。そして何より、エドヴァルド・

グリーグのように、シンプルでありながらも美しく、多くの人に実際に演奏してもらえるような、高度な演奏技術をそれほど要しない曲を作りたい。

もちろん、演奏者の存在を一切念頭に入れず、自分の表現したいものを純粋に曲の形にした結果、それが演奏不可能な曲になることも今後発生しうるかもしれない。ただし、原則として、曲は人に演奏されることによって初めて育まれるものであるという考えがあるため、実際に演奏可能な曲を作りたいと思う。

音楽に無縁だった私が作曲に向かった意味は、自分の内側にある、自然言語で表現しがたいものを音楽言語で表現することにあるが、それ以上に重要なのは、科学的・哲学的な探究を通じて得られた人間存在に関する知見を音楽の形に変容させ、それを多くの人に共有することにあるのだと思う。音楽という美的領域の中に、真善美を梱包し直したいのである。

この強い思いを感じていると、ふと発達心理学の始祖ジェイムズ・マーク・ボールドウインやイマニュエル・カントを思い出し、彼らが美の領域を最も重要なものだとみなした理由がわかったような気がした。真善美の領域はどれもが等しく重要な価値を持っているのだが、そうだとしても、とりわけ美の領域には他の領域をつなぐ何かが横たわっている気がしてならない。倫理的判断の中に美があり、真理の中に美がある。

そのようなことを考えていると、ますます自分のやるべきことが見えてきたような気がする。人間に関する科学的・哲学的な探究の中で得られた気づきや感覚を曲にしていくという試みに、これから激しく打ち込みたいと思う。

早朝のフローニンゲンの空、そして朝日が降り注ぐ外の世界が、この上なく美しく見える。2017/8/29
(火)

No.130: Methodical and Systematic Music Composition

Music composition has a numerous number of techniques to compose music. First of all, I have to learn those techniques. My style of music composition should be methodical and systematic. It could sometimes look logical or even scientific.

However, that is what I want because I am inclined to usually rely on my senses. Since rigorous methodical and systematic music composition always has a space for welcoming my senses and intuitions, I will learn rigorously systematized composition methods and apply them intentionally and purposefully to my music composition. Saturday, 9/2/2017

1485. バッハのゴルトベルク変奏曲『アリア』から

作曲実践に関して新たな気づきを得たのでまた書き留めておきたい。それは昨日の自分の考えを若干訂正するものである。絶え間なく気づきと訂正を自己に施していくこと、それは人間として真に生きていることの証左であろう。気づきも訂正もない生活は、人間本質に反した生の営みであるよう思う。

先ほどふと気付いたのは、昨日、バッハやモーツアルト、そしてベートーヴェンのような偉大な音楽家の作品から作曲の型を構築していく方法はやめにするというものだった。その理由としては、彼らの残したピアノソナタが形式として強固なものであり、音楽の素養のない私がそれらの楽曲を分析・評価し、曲の解体から再構成を経て自分の作曲スタイルを確立していくというやり方はハードルが高いように思えたことがある。

しかし、改めて昨夜バッハの楽譜を眺めていると、形式ばった曲ばかりではなく、むしろ親しみやすいような曲が随分と多いことに気づかされた。感覚的には、数学の素養のない者が偏微分方程式の羅列を見ると敬遠してしまうが、抽象記号ではなく、数字だけの四則演算式であればどんな人も親しめるのと同じように、バッハの曲には随分と後者の形を持つ楽譜が多いように思えたのである。

当然ながら、内実としてはそうした親しみやすい楽譜の奥には深遠な音楽世界が広がっているのだが、表面上の容姿としては音楽の素人でもとても好感が持てる。ここから仮にバッハの楽曲から何かを得ようとするのであれば、どのようなアプローチで彼の曲に触れていくのがいいかと昨夜考えていた。

今手元にあるバッハのピアノ曲が全て収められた楽譜は650ページほどに及ぶ。これを最初から一曲一曲解析作業を進めていくのは全く得策ではない。単純に、自分が最も好きな曲から始めるのが最善だと思う。これは、そもそも自分が作曲に向かった動機と紐付けて考えてみれば、最も正し

いアプローチのように思える。私は自分の中で表現したいものだけを音楽で表現するためだけに作曲をするのである。言い換えると、表現を望まないものは一切表現しない。ここで重要なのは、表現を促すものはやはり自分の内側にある美意識だということである。

自分の美意識に則った形で自らの思考や感覚を曲として表現していく。バッハの曲を数多く聴いてみた時に、どれも恍惚的な美が体現されているのは間違いないが、自分の美意識と共に鳴する度合いは曲によって様々である。そこから、自分の美意識に最も合致する曲の分析から始めていくのが最善策だと思われた。今、書斎の書見台の上に広げられたこの分厚い楽譜は、ゴルトベルク変奏曲の『アリア』を開いている。

今の私は、この曲に強く共鳴しており、この曲から自分の作曲方法を確立する探究を始めていくことになるだろう。自分が共鳴する曲から始め、自らの美意識を培う中で作曲実践を行っていく。その過程を長らく歩んでいけば、きっと自分固有の美意識を体現した曲が生み出されるはずだ。2017/8/29(火)

No.131: Endogenous and Exogenous Developmental Disequilibrium

We experience two types of disequilibrium when we develop; endogenous and exogenous developmental disequilibrium. The former comes from us, whereas the latter derives from the outside, for instance, the environment.

Personally speaking, I have experienced both after I began to live in Europe. Both types of developmental disequilibrium squashed my tiny Ego and extended my Self. Now, I am in the state of developmental equilibrium, but I will experience disequilibrium again during this year. My intuition would be correct. Saturday, 9/2/2017

1486. 作りにする生活

今日は天気に恵まれ、昼食前にランニングに出かけた。ノーダープラントゾン公園はいつものように近隣住民の憩いの場としての役割を果たしており、犬の散歩をする多くの人々や、芝生の上でくつろぎながら、昼の太陽光が反射する池を眺めている人たちを見かけた。

ランニング後は、お決まりのインドネシアンレストランで昼食を購入した。この店主や店員たちとは随分と親しくなり、足を運ぶたびに会話の量が増えている気がする。その後、行きつけのチーズ屋でナッツ類とこれまで食べたことのない新しい種類のチーズを購入した。店主が最も勧めるチーズは何かを前回聞いており、今回はユトレヒトあたりで作られたチーズを購入することにした。一週間分のナッツ類とチーズ、そして今日の昼食を手に、自宅に戻った。昼食後、少しばかり作曲の実践を行った。

午前中に実証的教育学の専門書を読み進めており、作曲実践は良い息抜きになると改めて感じた。フローニンゲン大学での二年目は、科学的・哲学的な探究活動だけに時間を見てないようにしたい。

一年目をよくよく振り返ってみると、旅行に出かける日以外、基本的に一日に12時間から14時間ほどの学術研究に従事していた。土日や祝日など関係なしに、毎日が学術研究で始まり、学術研究で終わるような生活だった。そのおかげで随分と自分の身になった知識と技術があるのは確かだが、休みなく専門書や論文を読み続け、文章を書き続けていたことが果たして研究者としての筋力を適切に鍛錬することになっていたのかをもう一度考えてみる必要がある。

身体の筋力を鍛える時には、休みなく鍛錬をしていては筋力が成長することはおろか、筋力が衰えていく。これは思考の筋力についても当てはまりうる。実際に、休みなく長時間探究活動に打ち込むことによって、思考がそれ以上の活字情報を受け入れないことが何度もあった。一年目は往々にして、そのような状態を迎えるまで探究活動を日々続けていたように思う。

二年目に関しては、筋力を鍛えるのと同じように、必須の休憩を挟みながら探究活動に打ち込みたいと思う。ただし、二年目に関しても、土日と祝日に丸一日学術研究から離れることは、私の精神が受け付けないため、そうした休憩を設けるのではなく、一日の探究時間を8時間から10時間程度に抑え、残りの時間は作曲実践に充てたいと思う。

結局、読みに読み、書きに書き、作りに作るという生活の骨子は変わらないが、作曲という要素を取り入れることによって、学術研究に刺激と養分を与えたいたと思う。文章と音楽を作りに作る二年目の生活がこれから始まろうとしている。2017/8/29(火)

No.132:Affordances and Knowledge Acquisition

We can select a part of information derived from affordances if we utilize our awareness. This selection of information from affordances is crucial for our learning. It shapes the process of our knowledge acquisition.

Whenever I notice unique information from affordances or whenever I intentionally pick it up, I will just write it down to incorporate the information in the process of my knowledge acquisition.

Saturday, 9/2/2017

1487. 自己創出的・自己建築的な運動を促進する手段

昼食後、午前中に引き続き、科学研究における実験デザインと因果関係の推論に関する専門書を読み進めていた。フローニンゲン大学での二年目は「実証的教育学」というプログラムに所属し、子供の教育や成人教育の研究をより科学的に実施していくための知識と技術を獲得することを狙いとしている。

プログラムの開始は来週からであり、実際にクラスが始まるのは再来週だが、すでに課題図書が明らかになっているものは事前に入手し、学期が始まる前に少なくとも一読している状態にしておきたい。私は活字情報を理解するのが苦手であり、文字を書物から読み解くのに多くの時間がかかる。だから毎日膨大な時間を専門書や論文を読むことに当てているわけであり、学期が始まってから課題図書に目を通すようでは遅すぎるのだ。いい歳の成人が大学院に所属して何か学びを深める時、それは各人相当強い動機を持ってそこに所属しているはずであり、そうであれば、学期が始まる前に全ての課題図書に目を通すことが最低限の準備であり、学ぶことに対する最低限の礼儀だと思う。

午前中と午後にかけて読み進めていたのは“Experimental and Quasi-Experimental Designs for Generalized Causal Inference (2002)”というテキストであり、最初の章は丸々因果関係の議論に当てられている。因果関係についてはこれまで研究を進める中でたびたび自分でも考えることのあつたテーマだが、考えるたびに奥が深い論点だと思う。

今日はとりわけ、因果関係を巡る哲学的かつ科学的な論調に触れることが多く、頭を悩ませながらも、様々な発見がうっすらと自分の身体に入っていくような感覚があった。こうした感覚は、とりわけ未開拓分野の学習の初期に起こる現象であり、「因果関係」に関する知識と経験のネットワークはこれから密なものにしていく必要があるということを再度自覚した。

本書をしばらく読み続けた後、全く関係のない論点に思考が飛んだ。それは、能力の成長にせよ、器の成長にせよ、人間の成長は自分の内側に、目には見えないものを積み重ねていくプロセスである、というものだ。ここで述べている目には見えない何かとは、私たちの知識や経験である。私たちが器にせよ能力にせよ、内面的に成長していくというのは、目に見えるものをどこかに積み重ねていくわけではないのだ。例えば、何かしらの能力を鍛錬するために実践を行った後に、積み木のような物体が目に見える形でどこかに堆積していくわけではない。人間の成長は常に、目には見えない知識と経験をネットワーク的かつ構造的に積み重ねていくプロセスなのである。

それでは、私たちが成長を実現させていくために必要なことな何なのだろうか、という点を改めて考えていた。要諦は、そうした目には見えない知識と経験を何らかの手段を通じて形として内側に構築していくことだ。つまり、不可視のものを何かしらの表現手段を通じて可視化させていくのである。その手段は人それぞれであり、自らが実践や何らかの体験を通して得られた知識や経験を音楽や絵画として形にしてもいいが、誰にでも取り組むことのできる手段は文章を書くことだと思う。

知識と経験のネットワーク的かつ構造的進化が持つ興味深い特徴は、それらがひとたび形になると、その建築物がまた新たな知識と経験を呼び込むことだ。言い換えると、何かしらの表現手段を通じて、ネットワーク的かつ構造的に建築された知識と経験の建造物は、新たな建築素材を自発的に求めるのである。そしてそこでまたそれを形にする作業に取り組むことによって、建造物がより高度かつ堅牢なものとなり、それはまた新たな建築素材を求めるのである。終わりなき建築運動がここにある。

私たちが何か能力を涵養したいと考える場合には、この建築運動を活性化させるために、知識と経験を形にしていく作業が不可欠なのだと思う。形にしなければ、建築物が新たな素材を求める動力は弱体化していくだろう。作曲家のエドヴァルド・グリーグや画家のエドヴァルド・ムンクが貪欲に日記を書き続けていたのはまさに、彼らの芸術領域における技巧をより洗練された構築物にしていく

ための実践だったのだ。形は形の無いものを呼び込み、それを形に変えていくという自己創出的かつ自己建築的な運動を行う習性を持っているのである。そうであれば、能力の深みや高みに至るために不可欠なそうした運動を健全に推進していくためには、何はともあれ知識と経験を形にしていくということを行わなければならない。2017/8/29(火)

No.133: Self-Authoring and Our Life

Who can live his or her own life without self-authoring? Authoring ourselves is the gist of living our own life. Hans Jaeger, a Norwegian writer, articulated the importance of self-authoring.

I think that most modern people relinquish the attempt to discover their own meanings of their life, indulging themselves in concocted meanings made by others or society. Of course, the meaning of our life is socially woven, but the author should be ourselves. Saturday, 9/2/2017

1488. 音楽理論の学習と作曲実践の進展

昨日は久しぶりに随分と夜更かしをしてしまった。気づけば時計が深夜の12時を回っていた。普段は10時前から就寝の準備をするのだが、昨日は12時半に近くなつてから就寝の準備を始めた。その時間まで何をしていたかというと、作曲実践をずっと行っていた。厳密には、曲を作るというよりも、その前段階として音楽理論に関するMOOCを受講しており、さらには今使っているMuseScoreという作曲ソフトの可能性をさらに探究するための調べ物を行っていた。

音楽理論に関しては、この夏期休暇を利用して、手持ちのテキストを二回ほど繰り返し読んでいたため、随分と基礎的な事柄が頭に入りつつある。ただし、その基盤ですらまだ強固なものではなく、身体の次元で知識が獲得されておらず、時に曖昧な記憶のものが多くあるため、その辺りを今後は強化していく必要があるだろう。こうしたこともあり、テキストだけではなく、MOOCを通じても音楽理論を学ぼうと思ったという経緯がある。

ちょうど昨日、シンガポール国立大学のピーター・エドワード教授が提供する“Write Like Mozart: An Introduction to Classical Music Composition”という作曲コースを全て終えた。このコースは、音楽理論を学ぶ前の私にとってはかなりハードルが高かったが、全てのクラスの録画を見る中で、非

常に有益な作曲理論と作曲技術が随所に盛り込まれており、質の高いコースだった。このコースはクラシック音楽の作曲のためのものであるが、音楽のジャンルを問わず、作曲に有益な内容を提供してくれていると思う。

現在は自己の中で音楽理論の基礎が幾分か確立された状態にあるので、今日からまたこのコースの二回目の視聴を行いたい。一回目はコースの内容を聞くだけであったが、作曲は確かに理論を学ぶことも大事だが、とにかく自分の手を動かすことが重要なので、二回目は自らの手を動かしながら、コースで与えられる課題に取り組むことによって作曲技術を高めていきたいと思う。

昨夜は音楽理論に関する学習を主に進めていたのだが、全く作曲をしなかったわけではない。譜面に向かい、バッハのゴルトベルク変奏曲アリアの解析を進める過程で、曲を生み出す法則を掴まえようとしていた。MuseScoreの譜面上にアリアの第一小節から再現を始めたのだが、これまであまり見たことのない記号が出現したため、一つ一つの小節を再現するのに随分と時間がかかった。あるところまで再現をして、曲を再生すると、どうも自分の頭の中にあるアリアではないことに気づいた。

どうやらテンポの指定を間違えていたり、装飾記号のプラルトリラーとモルデントと呼ばれるものをつけ忘れている箇所があり、随分とぎこちないアリアが流れた。装飾記号は意味のない装飾を施しているわけではなく、一つ一つが重要な意味を持っていることを痛感させられた。このように四苦八苦しながらアリアを再現していく過程で、いろいろと学びになることがあり、今後も曲の再現を続けていこうと思う。ただし、このアリアを再現していく中で思ったのは、バッハの頭の中にあったであろう曲の構造を自己の中で把握できおらず、それと同じような構造を自ら生み出すことは相当に難しいということであった。

また、音階の展開も今の自分には理解に苦しむ進行があり、そうした箇所に出会うたびに思わず唸ってしまった。またしても、「このような曲を自分に作ることは不可能だ」という考えが一瞬よぎったが、バッハも最初から完成された状態で曲を生み出したわけでは決してなく、長大な時間をかけた鍛錬を経て、このような素晴らしい曲を生み出したのだということをもう一度思った。

バッハは一つの曲を作った後に、時間を空けてから何度も改良に改良を重ねるということを行っていたそうだ。バッハですらも、一つの曲を高度に完成された状態にするのに多大な労力と時間をかけていたのである。曲を寝かせ、曲を改定するという作業はどこか文章の執筆と同じものを思わせた。2017/8/30(水)

No.134: Research on Piano Works

I have various research topics, for instance, adult development, online education—in particular MOOCs—, philosophy of education, etc. Yesterday, my passion for research on music reinvigorated.

I have had a research idea for a long time to examine a piece of piano music by nonlinear dynamics or dynamic systems approach. Since a piece of music is a dynamic system, the applicability of those scientific fields would be promising.

I also think that network science can be applied to a piece of music because it is not only a dynamic system but also a dynamic network. The more I engage in music composition, the more I want to know unique features and structures of piano works. Sunday, 9/3/2017

1489. 無限と永遠の表現へ向けて

昨日までの晴天から打って変わり、今日は早朝から雨が降り注いでいる。辺りはうっすらとした暗さを持っており、今日は一日中書斎で仕事に打ち込むことを静かに指示しているかのようだ。今日は一日中雨のようだが、明日から数日間天気が崩れるようなので、昼食前に四日分の食料を買いに近くのスーパーに行きたいと思う。

昨夜は音楽理論の学習に多くの時間を見て、作曲実践についても少々時間を割いていた。その中で一つ気付いたことがあった。どうも現在行っているように、MuseScoreの譜面に一つ一つ音符を手動で入力していくことは、作曲効率の観点からあまり望ましくないのではないかと思った。この作曲ソフトにおいても、仮想ピアノキー ボードを画面上で活用することができるのだが、それも正直などこ

ろ使いにくいという印象を持っている。何か他にいい方法はないかと探していると、「MIDIキーボード」と呼ばれるものを見つけた。

これは作曲ソフトに情報を入力するための専用の機材であり、単独では楽器として使用できないが、作曲ソフトを活用する際の作業効率を格段に高めてくれるものである。この機材が存在することは以前から情報としては知っていたのだが、その存在をこれまですっかり忘れており、昨日は自分の抱える課題のおかげか、偶然ながらこの機材の存在を再度思い出すことができた。

MIDIキーボードと言っても、メーカーも商品も様々であり、いろいろ悩んだ挙句、鍵盤数が最も少なく、持ち運びに便利であり、書斎の机の上でも場所をとらないMIDIキーボードを購入することにした。作曲ソフト上の仮想ピアノキーボードでは、PCの文字盤を使うことになるため、それよりも実際の鍵盤を見ながら、習得した音楽理論の知識をもとに作曲を行いたいという思いが強くなつた。

今回購入したワイヤレスのMIDIキーボードは、鍵盤数は25個と少ないが、見た目がピアノの鍵盤であり、実際にピアノに触れているような感覚でピアノ曲を作ることができるのはとても嬉しい。作曲理論を学ぶ際にも、作曲実践を行う際にも、身体感覚を十分に活用したいと思っていたので、購入したMIDIキーボードは随分と自分の作曲体験を変えてくれると思っている。

購入したMIDIキーボードの商品説明をPCの画面を通して眺めていると、白と黒の鍵盤があるピアノという楽器の奥深さをまた知ったような感覚があった。人間と同じように、ピアノの潜在能力は限りないのではないかという思いが湧き上がった。一つには、ピアノがカバーする音域の広さに改めて感銘を受けた。ピアノは低音で言えばコントラバスをカバーし、高音で言えばピッコロよりも高い音を出せるそうだ。重厚な音と壮麗な音の双方をピアノという楽器一つで奏でられることは、この楽器が持つ大きな魅力の一つだろう。こうした音域の広さが貢献して、ピアノ曲の多様さと表現の多様さが無限大になっていく。私はピアニストではないため、ピアノの魅力はこの点だけにあるわけではなく、魅力そのものも無限大なのだと思うが、そのようなことを思った。

偶然ながら、昨日の午前中に科学研究と科学哲学に関する専門書を読んでいる最中に、無限や永遠を音楽として表現したいという思いが湧き上がっていた。ピアノの持つ無限の力を私が深く理解し、それを最大限に引き出すことができれば、無限や永遠をピアノ曲を通して表現することは可

能なのではないかという大きな希望に包まれた。自分が表現したいと思っているものの中で、大きな位置を占めるのはきっとしたものなのだ。コペンハーゲンの美術館で購入した“*The Secret Code*”という書籍の中にあった、ピタゴラスとプラトンの音楽探究についての記述を思い出す。

ピタゴラスが宇宙の調和の探究を進め、「天球の音楽」を打ち立てようとしたこと、ピタゴラスの発想を受け継いで美を体現する音楽について探究を深めたプラトンの姿が思い浮かんだ。コペンハーゲンで購入したあの書籍は、無限や永遠といったものを音楽で表現することが可能であるということを私に伝えるためにあったのだろう。その励ましを受けて、今日からまた気持ちを新たにして作曲実践に取り組みたいと思う。2017/8/30(水)

No.135: Quantification Issue about Music Analysis

I already have some knowledge and skill of nonlinear dynamics and dynamic systems approach, but I have to consider how to quantify pieces of music. Although I can sketch an overview of quantification, I need to cultivate my understanding of music theory because it gives me ample hints to quantify pieces of music.

One simple idea is applying music cords or scale degrees. If I can quantify every note in a measure, that would be ideal. Yet, even if I cannot quantify that way, the first option still ensures an acceptable amount of data points to apply nonlinear dynamics and dynamic systems approach.

I will continue to think about this research topic in order to enrich my understanding of piano works through my research. Sunday, 9/3/2017

[1490. 科学者・哲学者・作曲家として生きること](#)

今日は午前中に激しい雨が降り、買い物に行くのをやめようと思ったが、昼食前にちょうど雨が止んだため、四日分の食料を買いに近くのスーパーへ足を運んだ。学術研究と作曲実践を並行して行う毎日が、これまでにないほどに充実したものとなっている。楽しさを超えた楽しさ、喜びを超えた喜びが自分の内側に波のように押し寄せる。

以前、私が師事をしていたオットー・ラスキー博士に作曲を始めたことを伝えると、非常に喜んでくれていた。というのも、ラスキー博士自身がピアニストであり、なおかつ認知音楽学の学者でもあったからだ。ラスキー博士が私に伝えたメッセージの要旨はとてもシンプルであり、「音楽は人生を豊かにする。これからも継続して音楽に触れると良い」というものだった。

思えば、ラスキー博士は人間発達の研究のみならず、音楽の創作や詩の創作、そしてデジタルアートの創作など、芸術活動にも生涯を通じて打ち込み続けていることに気づく。また、私が最大の敬意を払っている、フローニンゲン大学に在籍する発達科学者のポール・ヴァン・ギアート教授も、科学論文をキャリアの最後まで執筆し続けることに並行して、画家としても絵画作品を数多く残し続けていた。科学者として、200本を超える査読付き論文を執筆し、それに並行してあれだけ優れた絵画作品を数多く残すことが可能なのだ。学術研究と芸術活動の二つに深く従事し、両方の分野において傑出した仕事を残すことは十分に可能だということを二人は私に教えてくれている。これがどれだけ大きな励ましになっているだろうか。

昨夜消灯後、ベッドの脇に置いているメモを突然取り出し、和訳すれば「自分は科学者・哲学者・作曲家として最後まで生きる」という内容の走り書きを残していた。このような生き方は全く馬鹿げないことではなく、こうした生き方が可能であることをラスキー博士やヴァン・ギアート教授などから直接身を持って学んだように思う。

現代社会においては、真善美的探究に関して、どれか一つの領域の探究に偏りがちであるが、自分にはそれができないことを知る。欧洲で生活を始めて以降、なおさらそのような生き方ができないと痛感し始めたのだ。

昨夜の就寝時に書き残したメモを見ると、三つの領域は相互に影響を与え合っているため明確な区分はできないが、どうやら自分は、作曲家として美の領域を探究し、哲学者として善の領域を探究し、科学者として眞の領域を探究する強靭な意志があるようだ。そして、それら三つの領域の探究を並行させる形で、それら三つの職業と領域を一つの統合体とするように生涯を捧げよう、という力強いメモが書き残されていた。一つ一つの領域の探究にどれだけ時間がかかるかも構わない。ただし、それら三つの全てを探究し続けるということだけを自分に誓いたい。

夜は明るく、明日はとても明るい。2017/8/30(水)

No.136: The Arrival of a MIDI Keyboard

I completed an introduction course of music theory. It was very beneficial to establish my basic knowledge foundation of music theory. Learning without practice exacerbates the progress of constructing knowledge. Thus, I always use my MIDI keyboard whenever I learn a concept or theory of music.

By the way, when I got the keyboard two days ago, I felt jubilation as if a child opened a Christmas present. My life will be replete with colorful music everyday. Sunday, 9/3/2017

1491. 黒の黒さに酔う夢

暗闇の奥の暗闇。真っ黒の奥にある真っ黒な深淵を覗き込むような夢だった。昨夜の夢は少々不気味な内容だった。

古びた一つの建物の一室に長机が置かれていた。そこには人影はなく、木で作られた長机が部屋の中央に置かれており、その脇により豪華な材質でできた机が置かれていた。人影のないこの部屋に、突然二人の男が現れた。一人は米国人のキャリアの豊富な有名な俳優であり、もう一人は見知らぬ中年男性だった。

二人は共に真剣な顔で対話をしており、あるところで見知らぬ中年男性が長机の上に横たわっていることに気づいた。身動きが取れない状態で長机の上に横たわらされており、俳優の男性がその中年男性に近づき、何か情報を聞き出そうとしているようだった。そこで俳優の男性がジャケットから取り出したのは、注射器であった。長机の上で身動きが取れない状態でいる中年男性は、頑なに情報を口に出すことを拒否しているようだった。

俳優の男性は冷静な顔を崩さないまま、取り出した注射器を長机の上に横たわる中年男性の右腕に刺した。すると、その男性の体全身の主要なツボから血が滲み出した。それでもまだ中年男性は口を割ろうとせず、俳優の男性はもう一度注射器を中年男性の腕に刺した。すると今度も同じ箇所から、しかしそれより量の多い大量の血が噴き出した。その瞬間に、誰かが部屋の外の階段を勢い良く

上ってくる音が聞こえた。これまで冷静だった俳優の男性は表情を変え、慌てて長机の横の豪勢な机の下に隠れた。

この瞬間、机の下で息を潜めている俳優が私になっていた。部屋のドアを蹴り破るかのように一人の若い男が部屋に入ってきた。どうやらその男はFBIの捜査官のようだった。この捜査官に見つからないように、私はじっと息を潜めながら豪華な机の下にいた。

捜査官の男はくまなく部屋を調べながらも、私の存在に気づくことはなく部屋を後にした。それを確認した後、私もすぐさまこの部屋を後にし、階段を駆け下りた。どうやらまだFBIの捜査官はこの建物内にいたようであり、彼は階段を降りる私の足音を聞き取り、私の後を追うように走り出したことがわかつた。

この建物から急いで外に出た瞬間、その捜査官がもう私の背後にいることに気づいたが、その気づきが私の全身を飛び上がらせ、この建物の屋根に私を飛ばした。その屋根はほぼ平坦であるが、少しばかり傾斜のある四角錐の形をしていた。その屋根に張り付くように身をかがめながら、屋根の下を見ると、建物から外に出たFBIの捜査官が顔を左右に振り、私を探している様子が見えた。

そこで私は屋根の真ん中に行き、気付かれないようにさらに身をかがめていた。すると、屋根の真ん中にタイヤのようなものが埋め込まれており、その下はこの建物の真下に続くかのようにくり抜かれていた。このタイヤのようなものを通じて建物の中を覗き込むと、そこに見えたのは不気味なほどに真っ黒な闇だった。真っ黒な世界を真っ黒な世界で上塗りした空間がそこに広がっていたのである。

この深遠な闇の世界を覗き込んだ時、闇のあまりの深さにめまいがした。黒の黒さに初めて酔った。その世界を覗き込んだのはごく一瞬であったが、これは覗き込んではならないものだとわかった。闇を貫く本当の闇と黒の黒さが今の私には耐えられなかったのだ。

タイヤのような物体から顔をそらした時、少しばかりまだめまいが続いていた。しかし、それでも私は屋根の上に身をかがめて、FBIの捜査官がその場を立ち去るのをじっと待っていた。そこで夢から覚めた。

ポツリポツリと雨が降り、薄い闇に包まれているフローニンゲンの早朝世界。起床した私は、夢の中でわずかばかり覗き込んだ、黒の存在だけで充満したあの暗闇の世界を少しばかり思い出していた。黒の黒さに酔ったのは初めてのことだった。2017/8/31(木)

No.137: The Detrimental “Banking Education”

Paulo Freire castigates “banking education,” which is education coercing learners to store information. That kind of education is still prevalent in the modern society.

Needless to say, banking education is detrimental not only to child learning but also to adult learning. The principal reason is that we are not a closed system that is the underlying concept in banking education. On the contrary, we are a dynamic open system that is not based on a mere input-output relationship. It is always exchanging information with the outside.

When do we overcome the outmoded and deleterious paradigm in education? I think it is now.

Sunday, 9/3/2017

1492. スペインの片田舎から

黒の黒さに酔う夢の印象が極めて濃いものであったため、もう一つ別の夢を昨夜見ていたことを忘れていた。夢の中で私は、若くたくましさを感じさせてくれる一人の少年と出会った。彼は日本人であり、年齢は10歳だ。彼と出会ったのは、スペインの片田舎の都市の食堂だった。

その食堂は、地元のサッカーチームのクラブハウスの中にある。私がなぜスペインの片田舎の都市にいたのかは定かではなく、このサッカーチームも特に有名なチームではなく、私はそこで何をしようとしていたのかいまだに謎である。ただ、そこでこのチームの少年世代の試合を観戦したいという小さな思ひだけがあったことは確かだ。私の横には顔がわからない知り合いが座っており、その人物と会話をしながら昼食を摂っていた。

すると、その少年がこちらに駆け寄ってきて、元気良く私たちに話しかけてきた。この子は生まれてからずっとスペインで生活をしており、日本語は極めて流暢でありながらも、敬語を知らないようだった。というよりも、その場の文脈に応じて日本語が変幻自在に変化するという性質を体験したことが

ないようだった。全く物怖じしない少年の話す姿はとても微笑ましく、彼と二、三言葉を交わして、彼が午後から出場する試合を観戦することを約束した。

ゆったりと昼食を摂った後、一緒に食事をしていた知人と別れ、私は食堂を出た。あの少年が出場する予定のサッカー場は食堂の眼と鼻の先にあった。会場に着き、席を確保してしばらくすると、試合が始まった。どうやらその少年はストライカーのようであり、終始相手陣内の奥で活発に動き回っている。前半のうちに彼が2ゴールを挙げた。それによって、今季の彼の通算得点は、開幕2試合目にして5ゴールとなった。

前半終了のホイッスルが鳴ると、少年は監督が座っているベンチに駆け寄り、監督の戦術に対して意見を述べ始めた。彼は別に監督の戦術に不満があるようではなく、嬉々とした表情で、「もっとこうしたらチームの戦い方が良くなる」ということを身振り手振りを用いながら、流暢なスペイン語で語っていた。

前半が終了し、相手チームとのベンチの入れ替えのため、コートを横切っている最中もずっと、その少年は監督に話しかけていた。見るとその監督は、とても優しそうな老女だった。その老監督は優しく微笑みながら、その少年の声に耳を傾けている。後半用のベンチに到着すると、今度はその少年が、監督やコーチ、そしてチームメンバー全員を集め、ホワイトボードを用いながら、一人一人の選手の細かな動きを指示し始めた。

説明を続ける最中、その少年はずっと嬉々とした表情でとても楽しそうだった。サッカーにかける情熱がその場にいた全員に伝わっており、彼が10歳だろうが日本人だろうが関係なく、チームの全員が彼の話に耳を傾けていた。私は彼が2ゴール挙げたことよりも、彼の情熱的な姿勢に対して静かに感動していた。その姿を見れただけで私は満足し、後半を観戦することなく、サッカー場を後にした、そして、このスペインの片田舎の町からも姿を消した。

振り返ってみると、この夢も印象に残るものだった。スペインの片田舎にいた10歳の日本人少年。あの物怖じしない態度と口調は、どこかで出会ったことのある人物だった。そして何より、溢れんばかりの情熱を持って何かに全身全霊で打ち込む彼の姿は、必ずどこかで見たことがあった。彼が誰かは自分だけが知っている。2017/8/31(木)

No.138:A Time Period and Music

Edvard Grieg's violin sonatas woke me up to start my today's activities. His violin works perfectly match my moods in the early morning. Interestingly enough, there are proper timings to listen to specific music. Some music is harmonious with moods in the morning, whereas other music is mellifluous for moods at night.

On the basis of this finding, I think that I can compose a different piece of music according to a time period of a day. I can imagine that the piece of music that I compose in the morning would be distinct from that I compose at night. I will experiment how diverse my music is in accordance with a time period of a day. Monday, 9/1/2017

1493. 受け継ぎ、受け継がれるライフワーク

午前中の仕事が半ばに差し掛かった頃、書斎の窓の外から小鳥の鳴き声が聞こえ始めた。それは「ピヨピヨ」や「ちよちよ」という音として一旦認識されたが、そうした擬音語では表現できない何かを持っていた。それが音の魅力である。

今日は八月の最終日であり、明日からいよいよ九月が始まる。それはフローニンゲン大学での二年目の探究生活が本格的に始まる日でもある。日々、学術研究と作曲実践に励むことができ、その他に何も望むことがない。望むべきことは、表現に必要な土台の知識と技術を獲得し、実際の論文を絶えず書き続け、実際に曲を絶えず作り出す日がやってくることである。今はそうした日に向けた準備を毎日行う時期にある。

自分の中には常に今の自己を超えた自分がいる。超越的な自己へ向かう道は、自己へ帰る道であるということを改めて思う。すでに自分の内側にいる現在の自己を超えた自己へ向かう道中は、絶えず現在の自己との乖離を突き付けられ、苦しいことがあるかもしれない。自己へ帰る道を歩く最中、それは超越的な自己へ向かうのと同様に、自分が一体どこに向かっているのか分からなくなることがあるかもしれない。

私たちが発達を遂げていく際に通るこの二つの道は、私たちを大いに悩ませる。だが、どちらの道にせよ、それらは共に自己が通るべくして存在している道に他ならない。二つの道の分類は普遍的だが、二つの道の特性は各人様々だ。そのようなことを静かに考えていた。

今日は思考がとても散逸的であり、次から次へと脈絡のない別の考えに思考が移っていく。突発的な雨が止み、夕方に考えていたのは、一人の人間がなす仕事についてであった。このテーマは以前から自分で最も重要なものの一つとして存在し続けている。一人の人間の仕事は、必ずいつかどこかの誰かに受け継がれるのだという気づきは、私をとても勇気付け、安堵感をもたらす。

一人の人間のライフワークは、その人の中で完結しないという特徴を不可避に持つ。自分のライフワークは、他の誰かのライフワークとして受け継がれていくのだ。自分の仕事が必ず他の誰かに受け継がれていくことに、私は計り知れない尊さを感じる。いつの時代のどこの誰に自らの仕事が受け継がれるのかはわからない。今それがわかるはずもない。

だが、自らの仕事を受け継ぐ誰かがきっといるという確信に似た信念が、自分の内側から湧いてくる。なぜそのような感覚になるのだろうか。それは、自分が過去の多くの人間たちの仕事を受け継いでいるという確かな感覚があるからだ。一人の人間の仕事が必ず他の誰かに受け継がれるというこの事実は、一人で生きているわけではないという強い実感を私にもたらす。そう、やはり私は一人で生きているのではなかったのだ。2017/8/31(木)

No.139:Piaget's Continuous Writing

Jean Piaget was a man who continuously wrote throughout his life. Writing for him was an indispensable form to expand and elaborate his thoughts.

Writing is action itself to reflect upon and sophisticate our thoughts. Our knowledge is the constructive product that refines itself in a continuous way.

Writing enables us to organize our recurrent thoughts so as to make them more elaborated. This is the developmental process of knowledge. Monday, 9/1/2017

1494. 自分を象徴する印象的な夢

まるで深海にいるかのようなダークブルーの早朝の景色。青の深さをこのように目の前に提示されると、とても黙想的かつ厳肅な気持ちになる。

今日は朝から自分の内側に活力がみなぎっており、自分のなすべき仕事を淡々と激しく進めていく一日としたい。早朝の目覚めは、夢の終わりと同じタイミングであった。昨夜の夢は、とても強い印象を私に残している。

夢の中で私は、中学校時代に遡り、修学旅行に出かけることになっていた。夢の始まりは、宿泊先の少し古びた旅館だった。今回の修学旅行はどうも学年の全員が参加するものではなく、学年の半分が参加するような旅行だった。

現地での観光が始まる初日、観光先に向かうバス乗り場になかなか友人たちの姿が見えなかつた。まだ旅館でゆっくり朝食を摂っているのだろうと思い、私はしばらく一人でバス乗り場で待つことにした。しかし、バスはすでに到着をして出発の準備をし始めたにもかかわらず、友たちはまだ来ない。仕方ないので私は、友人たちを迎えて旅館に引き返すことにした。

古びた旅館に到着し、その玄関のドアを開け中に入ると、一階の大広間で10人ほどの友人たちがまだ朝食をゆっくりと摂っていた。そんな彼らに対して玄関から、「バスがもう来たよ」と伝えた。すると彼らは、「それはいけない。早く朝食を食べよう」という雰囲気を出しながら朝食を済ませようと始めた。

私は大広間に上がるのをせず、玄関で彼らを待っていた。一人の友人が玄関から旅館の中に入ってきて、私はその友人と玄関で話をし始めた。しかし、何分経っても大広間で食事を摂っている彼らは玄関に姿を現わすことがない。時計を確認すると、バスがバス乗り場に到着した午前八時半からすでに四時間が過ぎていて昼の時間となっていた。

もう一度大広間の彼らの様子を見てみると、まだ朝食を食べている。私は呆れ果て、「もう朝食を食べるのやめて、出発しよう」と少々声を荒げて彼らに述べた。すると、友たちはようやく朝食の食

器を台所へ持つて行き、朝食を食べることをやめ始めた。ようやく出発ができると思った矢先、なんと友人たちは昼食を大広間の大きなテーブルに運び始めたのだ。

美味しいそうな肉まんや餃子を大量にテーブルに運び、それを食べ始めた彼らの姿を見て、私はもはや言葉を失った。修学旅行に来て、旅館でずっと食事を摂っている友人たちの姿に呆れ果て、彼らの巻き添えを食らって自分もバスに乗り遅れてしまったことと相まって、怒りに似た感情がこみ上げてきた。

私は玄関から大広間に上がり、大声で彼らに向かって罵声を浴びせた。すると、友人たちだけではなく、なぜか台所で料理を作っていた彼らの保護者も驚いたような表情を見せ、全員がその場で私の一喝に身を縮ませていた。その姿を見たところで私は大広間を後にし、玄関から外に出てバス乗り場に向かった。もうバスは出発しているため、バス乗り場に向かって歩き続けようとしたが、知りながらも、そこに向けて歩き始めたのである。

バス乗り場に向かう最中、町のカフェで先ほどの友人たちの姿を見かけた。10人ほどの友人が半々に分かれ、別々のカフェでゆっくりくつろいでいる。各々のカフェではそれぞれ10人の男女がとても楽しそうに談笑をしていた。その姿を脇目に、私は一人でバス乗り場に向かって歩き続けようとしたが、突然雨が降り始め、この町を歩いて観光することもやめにして、旅館に戻ることにした。

旅館に向けて引き返していると、地方の城下町には似つかわしくない、東京タワーのような建物が左手に見え、その高いタワーのてっぺんに学年で一番背の高かった友人が私に向かって声をかけてきた。彼は私のことを気にかけてくれているようであり、どこに行こうとしているのかを私に尋ねた。私は旅館に戻って本を読んで過ごすということを彼に伝えた。

彼の次の質問は、「修学旅行は楽しいか?」というものだった。その質問は答えるまでもないと思ったが、楽しいということは微塵もなく、友人たちの愚かさに呆れ返っている、と彼に伝えた。すると彼は、「それは話ができる人間がいないからか?」という核心を突く問い合わせてきた。その問い合わせを受けた時、私の年齢は現実世界の今の年齢に戻った。

彼の質問に対して、私は少し黙っていると、彼の方から「XXとなら話ができるんじゃない?」と問い合わせてきた。すかさず私は、「XXは自分よりも年齢が半分にも満たない中学生だ。しかも彼とはサッ

カーボールを介してしか会話ができない」とタワーのてっぺんにいる友人に向かって叫んだ。すると彼は最後に、「それでいいじゃないか」と述べた。彼の返答に対して私は、「このように言葉で人と話がしたいんだ」と大声で叫んだ。

友人はうなづきながら私に手を振った。旅館に戻って大量の本を読み、他の誰も自分の内側の世界に入つてこられないぐらいに文章を書こうと誓いながら、私は城下町を一人で歩いていた。そこで夢から覚めた。

深海にいるかのようなダークブルーの世界はもうそこにはない。今日の前に広がる世界は、雲がなくライトブルーの早朝の鮮やかな空だった。雲ひとつないこの広大な空が、これから朝日を迎える。2017/9/1(金)

No.140: Miscellaneous and Authentic Experience

Mere experience is just a hodgepodge of thoughts, feelings, and senses. We have to elaborate it in order to make it meaningful for deepening our life. To sophisticate our muddled experience, we have to sift it out by verbalizing it. Our words have an inherent function to crystallize our experience.

Although our words also possess an intrinsic limitation to draw a borderline in the inner reality, we have to pile up our words to overcome it. Only after we reshape our miscellaneous experience by verbalizing it, authentic experience for cultivating the quality of our life emerges in front of us.

Monday, 9/1/2017

1495. 型を求めて

数日前から受講していた、バークリー音楽大学が提供する音楽理論のオンラインコースを無事に全て視聴した。これまで書籍を通じて音楽理論を学習してきたこともあり、このコースについていくことはそれほど難しくなく、また得るものが多くたったように思う。これは音楽理論に関する本当に基礎的なコースだったが、書籍を通じてではなかなか分からぬような項目を、実践を通じた身体レベル

で理解を深めることができたように思う。やはりその道の専門家に師事し、支援を得ながら学習を進めていくことが重要だということを改めて思った。

オンラインではなく、身近に作曲の専門家がいれば理想的だが、今の私はそのような環境に置かれていない。そのため、今はとりあえずオンラインの環境を十分に活用し、できるだけ専門家が提供している作曲講座を活用したいと思う。

偶然ながら、先週末のオンラインゼミナールの中で、受講生の方が日本の伝統芸能の話をしてくれた。そこでのやり取りを通じて、型を通じて自分の表現したいと思うものを表現していくことの大切さに改めて気づかされた。

伝統芸術における型の重要性を実感すればするほどに、まずは型の習得を抜かりなく行いたいと思う。型というのは決して自由を束縛するものではなく、むしろ逆に自由な表現を可能にするために不可欠なものだと考えている。

即興的に生み出される芸術作品にせよ、音楽にせよ、そこにはやはり型があるのだ。型の習得があつて初めて、その場で即興的に自己の内側の現象を外側に表現することができる。型がなければ、そこで生み出されるものは何の価値も持たない混沌としたものになってしまうだろう。

長大な探究と時間をかけて生み出された伝統芸術の型は、それを習得して初めて、その領域の表現物が持つ価値を評価することができるようになるのだと思う。膨大な探究と時間を積み重ねて生み出された伝統芸術の型を無視し、全く型のない状態で即興的に生み出されたものは、価値判断の俎上に乗ることはないだろう。残念ながら、こうした即興物は評価の基軸を持たないがゆえに、やはり存在価値はほとんどないと言える。

そのように考えると、作曲に関して強固な型を習得することを私はまず最優先にしなければならない。現在は独学で作曲を学んでいるが、いつか正統的な教育を受けたいと思う。それが何年先、何十年先になるのかわからないが、幾つになってもいいので、どこかで作曲を体系的に学び直すことをしたい。

バークリー音楽大学が提供する音楽理論のオンラインコースを担当している教授は、ジャズ音楽を専門としているようであり、ジャズの精神が彼の中に強く息づいているのを感じる。コースを受講している最中、ジャズの魅力を感じることが度々あったが、やはり自分の感性に率直に従うと、クラシック音楽の方により強い魅力を感じていることがわかった。

クラシック音楽の枠組みは、まさに過去の偉大な音楽家が長大な時間をかけて築き上げてきた賜物であり、それをまずは習得したい。クラシック音楽の枠組みの中に、現代に生きる自分の思考や感覚、そして問題意識を流し込み、それらを自由自在に表現できるように、今日もまた作曲の学習を大いに進めていきたい。2017/9/1(金)

No.141: Evidence-Based Education Program at University of Groningen

My second year at University of Groningen started today. I am honored to be accepted in the Evidence-Based Education (EBE) program.

In my first year, I focused on adult learning from the perspectives of dynamic systems approach and nonlinear dynamics. I will continue to research on adult learning from those perspectives, but I want to incorporate theories and methods of evidence-based education into my research.

I plan to conduct research on MOOCs, integrating the methodologies in all the fields mentioned above. Since I have engaged in collaborating with Japanese large corporations for their employee training and evaluation for several years, the knowledge and skill that I learn in the EBE program will be beneficial for my professional work, especially for program evaluation. Monday, 9/1/2017

1496. 時間の箱と自分の時計

今日も時の流れは速く、あっという間に一日が終わりに近づいていることを実感しているが、とても充実した一日であったと感じることができている。自分だけの時計を持ち、偽りの時間の箱から抜ける日々が続く。自らの時計をこしらえ、その針を自分で一つ一つ進めることを超えて、時計をしていたことすらも忘れる形で日々を生きて行く生活。

大切なのは、自分で自らの時計を作り、それを身に付け、一切時計を見ることなく一日を過ごすことだろう。その瞬間瞬間に生きる人に、どうして時を刻む時計など必要なのだろうか。自分自身の時計を作り上げることは大切であり、同時にその時計を一切見ない形で過ごすことが何より大切だ。

夕食時に沈みゆく夕日を眺めることができてとても嬉しく思う。こうした時間を過ごせるのはあとわずかとなった。これから季節は、夕食を摂る際に徐々に夕日を眺めることができなくなる。その代わりに、濃さを増す闇夜を見ることになるだろう。その日が刻一刻と迫っている。ここでも重要なのは、刻一刻と迫るそうした日を指折り数えるのではなく、闇夜の訪れる世界の中に全てを委ねることだろう。夕食を摂りながらそのようなことを思った。

今日は明日に迫ったオンラインゼミナールの第五回目のクラスの準備を行い、午前中には発達科学の専門書を一冊ほど読んだ。発達理論と始めて出会った頃と比べてみると、こうした専門書の中で目新しい発見事項というのは随分と減ったように思う。しかし、それでも毎回必ず何かしらの小さな気づきを得ることができているのは確かだ。

日々の探究活動はとても地道であり、一つ一つの点としての小さな知を丹念に拾い上げ、それを数珠つなぎにしていくような作業に似ている。今日もいくつかの知と出会い、それを自分の手で拾い上げる過程を通じて、自分の内側に数珠を作った。私はおそらく、一生をかけて、輝く小石を拾い上げ、それを繋げていくことに従事していくのだろう。

午後、その日にこなすべき仕事が終わり、作曲実践を進めていた。作曲に関して、自らの作曲実践の進展や曲に対する評価を継続的に実行する仕組みが必要だと思った。そこからさらに、作曲理論を学ぶための仕組みと作曲実践を行っていくための仕組みも必要であることに気づいた。「評価・理論・実践」を自分で作った仕組みの中で遂行させていくこと。

理想的には、それらの要素が相互作用するような、さらに包括的な仕組みを自分の内側に構築していく。理論のみでは壁に突き当たり、実践だけでも壁に突き当たる。壁を壁だと感じさせない形で、作曲実践が、無限に続く音楽のように進行していくためには、そうした包括的な仕組みを自らの手で作ることが大切になる。こうした仕組み作りを行っているのが今の自分の姿だろう。

実践を長く継続させていくことが、当該実践領域の能力を高めていくために何より必要なことであり、こうした仕組み作りの構築を様々な模索を経ながら完成させていきたい。2017/9/1(金)

No.142: “Sketch-Like Composition”

Since I got a MIDI keyboard a couple of days ago, my music composition became much more efficient than before.

I wish I could compose a small piece of music as freely and naturally as I keep a diary everyday. I might be a little bit covetous, but I want to compose at least three pieces of music everyday; one in the morning, another in the afternoon, and the other at night.

I have no intention to create a masterpiece. However, I cannot repress a spate of energy within me to create music. That is why I want to liberate the irresistible energy from my inner world by making it a piece of music.

To create at least three small pieces of music, I need to acquire robust knowledge and skill of music composition. As a painter does, I want to “sketch” my inner world as the form of music at will.

Since my purpose to compose music is just giving a life to my inner phenomenon as musical expression, the length of each piece of work should not be so long; it can be around 30 to 60 measures in a score. I name it “sketch-like composition” or “1-2 pages composition.” I will continue it until the end of my life. Monday, 9/1/2017

1497. ムツィオ・クレメンティと理論という公共財産

科学的探究を通じて科学的に自己を知り、哲学的探究を通じて哲学的に自己を知り、作曲実践を通じて音楽的に自己を知る日々が続いている。こうした日々が自らの道になる日が来るまで、まだ多くの年数を要するだろう。

学術研究も作曲実践もそれが日々の瞬間瞬間の呼吸と同じように行えるようになる日まで、鍛錬に次ぐ鍛錬を続けていきたい。一秒と一秒の間にある量子的な時間の粒が押しつぶされてしまうぐらいに、学術研究と作曲実践だけを行う日々がやって来て欲しい。そのような思いが日増しに強まる。呼吸ができなくなる日が、自分にとっての学術研究と作曲実践の終わりを示す日であるように、そこに向けて日々を生きて行く。

先日、ふとしたきっかけで、ムツィオ・クレメンティというイタリアの作曲家の存在を知った。彼を知ったのは、エドヴァルド・グリーグの楽譜を注文した時に、ちょうどクレメンティの楽譜が注文画面に表示されていたからだ。

クレメンティという名をこれまで一度も聞いたことがなかったため、少し調べてみると面白いことがわかった。彼は、モーツアルトと同時期に活躍していた作曲家であり、「ピアノの父」と呼ばれているぐらいに多数のピアノ曲を残している。特に、100曲以上のピアソナタを作曲し、ソナチネも多数作曲している。印象的だったのは、ベートーヴェンはピアノ曲に関してはモーツアルト以上にクレメンティの作品を高く評価していた点である。

このような事実を知り、クレメンティに対する関心が高まった。彼の作品を早速ダウンロードし、作曲実践のための楽曲分析に用いるために、クレメンティのソナチネの楽譜を購入した。ピアソナタのように比較的長い曲よりも、まずは短めのソナチネから分析を行いたいと思った。これまでのところ、作曲実践に向けた楽曲分析のために、幾人かの作曲家の楽譜を購入したが、やはり多様な作曲家の曲を聴き、それらを分析していくことが必要だと最近強く思う。

これは学術論文を執筆する時も全く同じであり、注目に値する学者の文体と文章構成を模倣するために、彼らの論文を分析的に読み進めたのと同じことを楽曲に対しても行っていく。単に彼らの作品を聴いていても何も見えてこない。ここで重要なのは、何かを見るためには観点が必要だということである。つまり、楽曲分析の観点であり、同時に分析を進めるための手法が必要になる。

こうした観点と手法を提供してくれるのが、音楽理論であろう。音楽理論の学習を通じて、自分の魂に共鳴する楽曲を選んで分析作業を進めていくことは、作曲のための大切な土台を作ってくれる。

そこからさらに、作曲の方法論 자체を学んでいくことも大切だ。音楽理論にせよ、作曲理論にせよ、一つ一つの理論には、偉大な音楽家の知と経験が凝縮されている。そして何より、それらの理論は、一人の音楽家によって構築されたものでは決してなく、これまで存在してきた様々な音楽家たちが共同して産み出した公共財産なのだ。こうした公共知の恩恵を授かりながら、これからは作曲実践に励んでいきたい。2017/9/1(金)

No.143: Knowledge Construction and Writing

The second day in my second year at University of Groningen just began. It is still dark outside. Keeping a morning diary is a lubricant to activate my mind and body for my work.

As I mentioned before about Jean Piaget, writing was a routine practice for him. He could build a massive edifice of his scientific work by his unceasing writing.

The process of knowledge construction is gradual, and that of word construction is also steady. Since both share a resemblance of gradual construction, writing to construct my thoughts at a slow speed can lubricate the process of my knowledge building. Tuesday, 9/5/2017

1498. グランドピアノから天に向かう夢

九月を迎えた最初の週末。いつもと全く変わらない時刻に起床し、六時を少し過ぎたあたりから一日の仕事を始める。今日と明日の土日は、平日と変わらず学術探究と作曲実践をする中で終わりを告げていくだろう。昨夜は初めて見る種類の夢を見た。

夢の中でピアノが現れるという夢だった。ここ最近、作曲実践にかける時間とエネルギーが増したからであろうか、自分の夢の中にピアノが初めて登場したのである。夢の中に登場したのは、二台のグランドピアノだった。二台のグランドピアノは一軒の広い家の中に置かれており、どちらも共にカバーが掛けられていた。カバーが掛けられていてもわかったのだが、そのうちの一台は、幼少期の頃に自宅にあった、母が使っていたグランドピアノだった。もう一台は、真新しい最新のグランドピアノだった。

二台のグランドピアノが置かれた家に訪問した時、私の横には男性なのか女性なのかわからないような女性が横にいた。どうやら彼女とは顔見知りのようであり、友人のようだった。その家の中に入ると、母が出迎えてくれた。三人でお互いに挨拶をしたところで、横にいた友人の女性がグランドピアノを見つけ、すぐさまそこに駆け寄った。

駆け寄ったのは、新しい方ではなく古いグランドピアノの方だった。彼女は母にピアノを弾いてもいいかの許可を取り、勢いよくカバーを外した。彼女はピアノの古さを一切気にすることなく、とても激しい演奏を始め、聴いていた母と私を驚かせた。激しいながらも美しさがある演奏だったが、その力強さにピアノが壊れてしまうのではないかという二人の心配があった。それが伝わったのか、彼女は後半から、先ほどとは打って変わって、とても静かな音色を奏で始めた。男性なのか女性なのかわからない謎めいた友人がピアノを満足するまで弾き終えたところで、夢がその曲を象徴するかのように、静かに別の場面に移行した。

その次の夢はまた特徴的だった。近未来の都市の道路を、私は友人たちと車で走行していた。車内には、私を含め四人の友人がいたように思う。どうやらここは、今から何十年も先の東京のようであり、私たちは羽田空港に向かっていた。実際には、空港に向かっていたというよりも、空港に引き寄せられていた、と言った方が正確だろう。

車の運転をしていた大学時代のゼミの友人が、「このまま行ったら羽田空港に到着してしまう」と述べたように、私たちの本当の目的地は別にあり、それは各人の自宅だった。この近未来の東京に、私たち以外に車で走行している者はおらず、羽田空港に向かう最後の一方通行の道の途中で私たちは一度止まった。空港に入る最後の箇所は、傾斜角度が激しく、道路が天に向かって伸びていた。より正確には、角度の激しい螺旋状の道路が天に向かって続いており、その最終地点が羽田空港だった。

自宅に戻るはずだった私たちは、目的地など関係なく、その螺旋状の道路を天に向かって進んでいった。その時の気持ちは全く覚えていない。気づけば羽田空港にいた。

空港には、日本航空と全日空の先代の会長に関する資料館があり、目的地の書かれていない飛行機が到着するまで時間があったので、私たちはその資料館に足を運んだ。車を止めたのは空港

の地下であり、資料館に向かうためのエレベーターに乗ると、そのエレベーターは不思議な仕組みになっていた。一階から三階までは各階に止まれるようになっており、そこからは五階と七階にしか止まれないようになっていた。そしてよくよく押しボタンを見てみると、七階の先が「天」と表示されていた。

その場にいた四人全員は、おそらく七階の先にある「天」という文字盤に気づいていたのだと思うが、誰もそれを指摘することをせず、四人のうちの誰かが五階と七階だけを押した。私たちは、最上階のさらに先に待つ「天」という場所などないかのように、五階と七階で展示されている資料を眺めて時間を潰し、目的地のわからない飛行機を待っていた。そこで夢から覚めた。

どちらの夢もとても印象に残っている。北欧旅行から戻ってきて以降、これまで断続的だった作曲実践に本腰を入れて取り組み始めたこともあってか、夢の中にピアノが現れたことは大変興味深い。ピアノが夢の中にシンボルとして現れるのはこれが初めてであった。よく外国語を真剣に学んでいる人が夢の中でその外国語を使う夢を見たりするのと同じように、ピアノが自分の無意識にまで流入し始めていることを示唆するような夢だった。

二つ目の夢に関しても、様々な意味付けをすることができるシンボルがいくつもあるが、やはり天に続く螺旋状の道路と目的地のわからない飛行機、そして「天」の表示がなされたエレベーターは、巨大な意味の塊が具現化したもののように思える。

天に至るために螺旋状の道を通らなければならない。それは一直線の道ではなく、DNAの構造のように螺旋的なのだ。夢の中で私たちはどうして、最上の安心感をもたらす自宅ではなく、目的地のわからない飛行機に乘ろうとしたのか。目的地がわからない場所に行くことに関して、誰もが黙っていた。誰もがそれを言いたくないと思っていたのか、それとも言う必要などないというような思いを持っていたのだろうか。私はそのどちらも当てはまるように思う。

エレベーターに乗って自動的に到着する、「天」という一つの場所に向かっていくのではなく、私たちはあえて各人異なる旅客機に乗って、別々の天に向かおうとしていたのだ。その天の先の先に、いつか全員が再会する一つの天が待っていて欲しいと思う。2017/9/2(土)

No.144: Associative, Constructive, and Autopoietic Beings

We are not so logical beings but associative beings. Whenever I keep a diary, I always notice that I utilize my associative ability to construct words. At the same time, a spate of words emerge within me when I write something; my previous words generate new words, which can be called “linguistic autopoiesis.”

To closely examine the nature of us, we might be associative, constructive, and autopoietic beings. I expect what I will create today by virtue of those intrinsic human propensities. Tuesday,

9/5/2017

[1499. 共通の天へ](#)

昨夜の印象的な夢を日記に書き留めたが、自分で施した意味付けに対して自分が圧倒されている。夢を見た段階では全くわからなかつたことが、そして文章を書き始めても全くわからなかつたことが、最後まで書いてみた時に、突如として巨大な意味を持つものとして立ち現れたのである。

あの夢のシンボルが持つ意味は、とても深く、残酷なまでに優しい。残酷な平穏さがあの夢にはあつた。各人が向かう別々の場所と全員が辿り着く同じ場所があるということ。それは無情なまでに平等であり、無慈悲なほどに慈悲深いことではないだろうか。

私たちは各人の天に向かうことと万民に共通の天に向かうことを宿命づけられているようだ。自分自身の天に向かうためには、あの夢が示唆するように、自分自身の乗り物を持たなければならない。それが私たち一人一人にあるだろうか？全員が一様に同じ手段で天に向かっていくわけではないのだ。一人一人の天に向かうためには、各人の独自の手段が必要であることを強く示唆する夢だった。

夢の中で私は、てっきり全員が同じ飛行機に搭乗するものだとばかり思っていた。しかし、私を含め、全員が別々の飛行機に乗るのだということにどこかで気づいていた。あの時の寂寥感を忘ることはできない。夢の中で私は、自分の感情に対して、見て見ぬ振りをしていたようだった。自らの感情と向き合いたくなかったのである。なぜなら、明確な姿の見えない天などに行きたくはなかったから

であり、各人が異なる場所に向かわなければならないという、不条理な必然性を受け入れることができなかつたからである。

あの場にいた全員も同じことを感じていたに違いない。自分自身の天に向かう不安と恐怖。その不安と恐怖ですら各人異なり、自分だけの意味が不安と恐怖という普遍的な感情に付与されていたのである。こうした不安と恐怖を抱えながら、全員が散り散りになり、自分だけの天に向かって進んで行くという不条理な条理を受け入れなければならなかつたのだ。

あの場にいた全員は、同時刻に各人別の飛行機に搭乗することを知っていた。飛行機の到着までに私たちが望んでいたことは、たった一つしかなかつた。それはいつものように、これまでと同じように何気ない会話をすることだった。

空港に併設されていた資料館の中で私たちは、各人が資料を思い思いに閲覧した後、結局館内の長椅子に腰掛けて、全員でたわいのない会話をしていた。必ずやってくる出発の時間を忘れるかのように、そこにあったのは会話だけだった。全員が同じ時刻の別の飛行機に乗るということ、それは私たちが生誕という一つの共通した出来事を契機として、産まれた瞬間から別々の道を歩んでいくことを宿命づけられていることを暗示しているように思えた。

人は一人一人に異なる道があり、異なる歩みがある。その道の先に固有の天があり、さらにその先には全員に共通の天があるようなのだ。私たちはこうした宿命を背負いながら、最終的には、あの残酷なまでに平穏な、無慈悲なほどに慈悲に溢れた共通の天に召されるのだと思う。2017/9/2
(土)

No.145: Three Types of My Diary

I categorize my diary into three types; diary for scientific work, diary for philosophical work, and diary for music composition. All of the fields are my passionate domains to engage in. As Jean Piaget did, I will keep a scientific and philosophical diary everyday, although mine is not similar to Piaget's rigorous writings.

It is famous that Tchaikovsky kept an immense amount of diaries—Mozart, Beethoven, and Edvard Grieg also had a habit to keep a diary. Following the daily practice of previous great composers, I will write down what I experienced and what I thought through music composition.

Tuesday, 9/5/2017

1500. 一期一会の余韻と独坐観念

今日のゼミナールのクラスの余韻が残り続けている。それは、大海の上に落ちた一つの石が作った波紋が、どこまでも遠くに伸びていくような感覚である。

昨日のゼミナールのオフィスアワーの中で、一人の参加者の方から「独坐観念」という言葉を聞いた。それは素晴らしい意味を持つ言葉だった。

一期一会の体験をした後に、一人で座し、静かにその体験を深く味わうこと。それが独坐観念の意味である。今日のゼミナールのクラスを終えた今、私は独坐観念の中にいる。今日のクラスで生まれた場というのは、あの時間だけのものだった。

もう二度と同じ場が生まれることはなく、同じ時間が流れることはない。まさにそれは一期一会の体験であったと言っていい。その体験の余韻がずっと消えることなく、どこか遠くの方へ伸びていく感覚がする。私たちの日常の全ての瞬間が、一期一会で成り立っているように思えて仕方ない。

その人との何気ない会話や自分の中のその感情。その瞬間に立ち現れる一期一会の現象を挙げればきりがない。日々が一期一会で満たされているのであれば、私たちは常に独坐観念の姿勢を持って生きる必要があるのではないだろうか。その瞬間にしか起こらない現象と出会えた奇跡を無視することなど誰にできるだろうか。一瞬一瞬が持つ時間の密度をくぐり抜け、一つの一期一会の体験が終わった後、私たちにできることは静かに座してその余韻に浸ることなのではないだろうか。

現代社会は時の流れも速く、次から次へと体験を私たちに与えようとする。こうした状況において、体験から体験に飛び移っていくような態度を持つのではなく、一つの貴重な体験が終わった後に、それを深く味わうという姿勢を強く持ちたいものである。体験そのもの中に生の充実さや幸福感があるというよりも、もしかすると本質的な充実感や幸福感は体験後の余韻の中にあるのかもしれない。

ひょっとすると、真の充実感や幸福感というのは、現象の余韻そのものに他ならないのではないか。

時間的にせよ、精神的にせよ、余白や余裕という言葉が淘汰されるような現代社会の中に私たちはいる。一つの体験から新しい体験に飛び移っていくような、体験消費的な態度を改める時期に私たちはいるのではないだろうか。

情報に満ち溢れたこの現代社会において、私たちのほとんどは情報の単なる消費者に成り果てている。私たちは、生きることに関する体験においても単なる消費者に成り下がっていいのだろうか。生の充実さや幸福さは体験を消費することの中にあるのではなく、体験後の余韻の中にあるのだとということを改めて考えるべきではないか。2017/9/2(土)

No.146: “Chord,” “Melody,” and “Theme” Analysis

I have been learning the progressions of chords as the first step to compose music, although there might be a different approach to practice music composition. Since imitating chord progressions is permitted, I analyze the chord progressions of some pieces of music that are my favorite.

In parallel with the analysis for chord progressions, I want to grasp the essence of creating beautiful melodies. Here, my next step would be analyzing melodies.

In addition, I will do “thematic analysis” by briefly describing the theme of a particular part of each piece of music, for instance, “gloomy feeling,” “joyful moment,” “metaphysical enlightenment,” etc. Tuesday, 9/5/2017